

新学期が始まり、どの大学のキャンパスも、萌ゆる若葉と色彩りを跳つて、華やいた雰囲気にあるようだ。そのようなときいささか旧聞に属する入試のことなどに触れるのはまったく場面に合わないと思うが、入試そのものからむ諸問題をここでうんぬんするつもりはないので、しばらくそのまま眼を走らせてもらおう。私が勤務する東京外語大は、御承知のとおり、国際関係の動きに比較的反応しやすい性質の大学であるためか、今年度は中国学科に人気が集まるだろうという推測記事を多くの新聞が齎っていた。M紙に



鞍馬天狗

たつては、受験生の受け皿をそのような推定の線でもめて写真入りで載せてもいた。私は、ははあ、また新聞が思い込みしているな、と感じていたが

国ブームをみずから演出し、それに踊っていたわが国のマスコミの好みからすれば、是非とも右のように思い込みたかつたのであろうが、当今の若者は、ごく一部をのぞいて、中国問題に

若者と中国

ついてはそんなに過熱してはいないのではないか、とつねづね私は感じている。当今の若者のフーリングからすれば、中国はあまりカッコよくない、というナウな中国像

があるのかもしれないが、それよりも、もっと本質的なところで、若者たちは、中国の社会的実践や政治の動きについて、意外にドライでクールな考え方をしており、そのことがかえってリアルな中国像を支えているのではないかとさえ思う。これまではあれほど熱烈に「革命」を鼓吹し、あれほど激しく「日本軍国主義」根絶をくりかえしていた中国が、なぜこうも急変して最近では、もっぱらわが国政・財界との密着を深めているのかといった問題についても、若者たちはその本質をかなりつきはなしたところで見ぬいているの

ではなからうか。だとすると、若者も中国ブームに浸されきっていると思ひ込んだわが国のマスコミは、この点でも結局、一人相撲をとっていたのであり、マスコミの中国ブームに乗せられて「中国でゆける」とすっかり信じこみ、中国を売りものにして見事に敗北した過般の繰返すで、今日の若者たちは、はるかに賢かったといえよう。若者にたいして、ちょっと点が甘すぎないかな……。

東大助教・国際関係論 中嶋嶺雄